

## トマト灰色かび病

### 1 病原菌の特徴

- (1) トマト灰色かび病は、糸状菌(カビ)の一種(*Botrytis cinerea*)が原因で起こる病気で、分生子が風などで飛ばされて植物体に付着して伝染します(写真1)。
- (2) この菌は極めて多犯性であり、トマト以外の野菜、花き、果樹、樹木などの様々な植物に被害を与えます。また、植物を腐敗させる能力が高く、被害株が伝染源となります。



写真1 菌の分生子柄と分生子  
(青色に染色)

### 2 被害の様子

- (1) トマトでは、果実、花、茎、葉などのあらゆる組織に発病し、特に果実の被害が大きくなります。
- (2) 果実: 花弁から菌が侵入し、幼果があめ色に軟化します。軟化した果実は腐り、灰色のカビを密生させます(写真2)。また、かすり状の1~2 mmの輪紋(ゴーストスポット)を作ることがあり、この場合は腐ることはありませんが、商品価値が低下します(写真3)。
- (3) 葉では、葉先枯れ部分や落花弁が付着した部分から病徴が広がります(写真4)。
- (4) 茎: 感染部より上部が萎れ、後に枯れてしまいます(写真5)。



写真2 果実の病徴

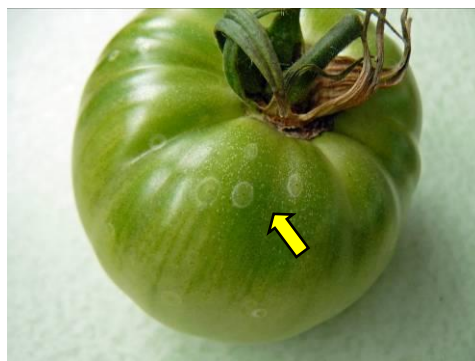


写真3 果実のゴーストスポット



写真4 葉の病徴



写真5 茎の病徴

### 3 発生について

- (1) 発生好的条件は、20℃前後の気温と多湿です。このため、施設栽培では、3～4月の天候が不順の場合に発生が多くなります。
- (2) 密植や窒素過多の栽培で茎葉が繁茂するなど、軟弱徒長気味の場合、発生が助長されます。
- (3) 被害果実を放置すると、発生が著しく助長されます。

### 4 防除時期と防除方法

- (1) 耕種的防除法
  - ア 樹勢を健全に保つため、密植栽培を避けます。カリ欠乏による葉先枯れは、発生を助長するので適切な肥培管理を行います。
  - イ 多湿防止のためマルチ栽培を行い、マルチの下に給水チューブを設置して、灌水はできるだけ少なくします。
  - ウ 冬季の栽培では樹勢管理と病害の発生を抑制するため、施設内の最低気温を12℃以上に保ちつつ、日中は換気に努めます。
  - エ 受粉の終わった花殻、被害植物の残さは伝染源となるので取り除きます。
- (2) 薬剤防除
  - ア 発生初期に防除を行います。
  - イ 灰色かび病菌は、薬剤によっては耐性菌が出現しているため、薬剤散布後、病害の進展度合いを観察し薬剤の効果を確認します。
  - ウ 耐性菌出現を抑制するため、異なる系統の薬剤をローテーション(輪番)散布します。
  - エ 施設栽培では、薬剤のダクト内投入散布法(使用方法に登録のあるもの)が効果的ですが、低温では効果が現れにくいので、10℃以上の温度を確保することが必要です。

#### 薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

- 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会
- 問合せ先(原稿執筆)  
埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409  
埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-0661



©埼玉県 2005

彩の国埼玉県